

広島俳句倶楽部

令和三年二月作品集

夕桜

敬子

私は、定年退職してから、毎朝家の近くの太田川沿いを散歩している。四季折々の自然の移ろいや、鶯や鶺鴒を題材として俳句を詠んでいる。「兩岸の若葉映りて朝の川」雄に初報句、林徹先生にもらった特選句。「鶺鴒の子被爆の椿を果立ちたり」これで俳句に取り付かれた。これからも、健康のために散歩を続け、自然の中の小さな発見を、折にふれ、俳句として書き留めていきたいと思う。

川風にゆさゆさ揺れて夕桜

舟寄する雁木に桜吹雪かな

花檣煙雨のなかに咲き始む

白鷺の三々五々に中洲癸つ

青鷺の冠羽吹かるる水辺かな

潮入を越えて聞こゆる蟬時雨

水脈を引き漁船の出づる冬の朝

さざ波に乗りて漂ふ百合鷗

それぞれに飛沫を上げて鴨の群

川岸に並ぶ小舟や冬夕焼

《作品鑑賞》

高尾ひとみ

広島に流れる多くの川、その兩岸には桜や楠など美しい木々が育っています。そこに来る水鳥や舟の出入り、そうした景色の中で生まれた佳句が並びました。

川風にゆさゆさ揺れて夕桜

飾らない言葉が夕べの桜の大きさを思わせてくれます。

舟寄する雁木に桜吹雪かな

川に張り出すように伸びた桜の枝からでしょうか。低くからの作者の視点が新鮮です。

青鷺の冠羽吹かるる水辺かな

静かに立ちつくす鷺の姿が見えるようです。

俳句をこの上なく愛する作者が、鳥や木と一体に融け合って、広島の四季を丁寧に写し取っています。一緒に川辺を歩いているような気持ちが出てきました。

元宇品公園 ～冬の日～ 美耶

広島市の南端にある小さな島には原生林があり、そこには、四季を通して鳥が訪れる自然豊かな公園があります。しばらく上ると白亜の灯台が見え、側には樹齢三百年の楠の大本が聳え立っています。遊歩道を下れば、波静かな砂浜が広がり、海岸はサイクリング、釣りなどを楽しめるスポットです。

冬鳥の羽音聞こゆる遊歩道

冬の鳥木立の枝を渡りけり

鳥の来てまた鳥の来て寒椿

落葉道下れば海の広がりぬ

自転車の二台置かれて冬の浜

冬の海船と並びて鷗飛ぶ

寒鴉しばらく浜を歩きをり

冬の波寄せて時をり靴の濡れ

夕映えの冬の木立を歩きけり

山裾に広がる海に冬日入る

《作品鑑賞》

高尾ひとみ

鳥や木、海、山、自然の中を歩く楽しさを感じさせてくれる佳句が並びました。冬の海は厳しさを思いますが、この作品には、生命力や明るさ、おらかさを感じます。元宇品公園を歩いてみたくなりました。

鳥の来てまた鳥の来て寒椿

冬山のそこだけ赤い寒椿、つぎつぎとやってくる小鳥の声も聞こえてくるようです。リフレインが喜びを伝えてくれます。

落葉道下れば海の広がりぬ

山裾に広がる海に冬日入る

落葉の道を下ると海、その大きな海に冬の日が沈む。ゆったりと自然に浸る豊かな時間を味わうことのできる作品だと思います。海を詠みこむことで、作品に大きさが出ています。

鶉の鳴く方へ山道分かれたる

歳晩の山また山のなかに居り

大榎すつかり木の葉落としけり

雪雲の過ぎようとする北の山

日輪の前をしきりに雪の降る

北風の収まらぬまま暮れにけり

臘梅の家を通りて駅に行く

裸木に大きな鶉の来てゐたり

水仙にときに日差の強くなる

冬滝に雨のひと目となりにけり

海を見に回り道して日脚伸び

暮れきらぬ港に上る寒の月

牛^{ひら}からの雨に打たる寒椿

探梅の足もと滑る道をゆき

本堂へ早梅の横上りたる

寒月の手前を雪の降つてをり

深き雪踏み行く人や夜明け前

雪からの雫に濡れる岩の苔

土手行けば立春の風吹きにけり

春一番楠の大本に吹きにけり

寒牡丹わづかに風の吹きにけり

寒暁の雲ひとつなき御空かな

窓越しにふと風花の流れけり

夜の風に吹き寄せられて小米雪

雪雲がひと日遠嶺を覆ひたる

滝音に近づいてゆく冬木立

雪道は滝の下へと続きたる

ひとり来て帰つてゆける雪野かな

水仙に海風強く吹きにけり

参道の白梅をふり返りたる

佐保光俊

村上正人

高尾ひとみ

とんど餅食ひしはらからみな鬼籍

亡き姉といつも一緒や小豆粥

梅林を亡き姉と訪ひ語りをり

亡き姉とともに歩かん遍路道

亡き姉の写真へ梅を活けにけり

空海の本読みをれば春の鳥

紅梅の下を子供の駈けてゆく

早朝の窓開けて見る春の雪

春の鸛跡山の森へ舞ひ降るる

御朱印を寺にもらひて鳥雲

雪折の音の聞こえて背戸の山

如月の日を存分に受けにけり

息切らし上る坂道梅の花

桃の花切つて出荷す朝の谷

牧広し雲のかたちに残り

また遠ふ鳥の来てるる紅椿

つかの間に町の見えたる春吹雪

竹垣の結び目に残り春の雪

堀越しに枝ごと揺れて花ミモザ

工場の灯の映る川鱸くる

一筋の醤油をたらす寒卵

校章を机に置いて冬休

順番に赤ん坊抱く二日かな

父と子の靴並びたる四日かな

冬の夜外語の歌詞をつぶやきぬ

冬の薔薇父子の鳴らすクラッカー

日脚伸び視力検査の輪の切れ目

日脚伸び車で主を待てる犬

春の空膝の赤子の笑顔かな

春の風鈴の目高のよく動く

阿姫

あぐみ

亜矢

里山の裾に見えたる冬紅葉

落葉して幹の白さよ天狗シデ

日溜りに鳩の群れたる冬の園

冬日向伏せたる猫と目の合ひて

小走りに犬と帰れる冬の夕

牡蠣揚ぐる水の光れる河口かな

冬晴の浜に老松並び立つ

大鷗の次々もぐる寒の川

池の面の鯉の静かに春初

林へと向かふ小道に雪残る

実南天散歩の犬の帰り来る

四つ角に薄日の差して寒椿

新しき道の開かれ梅見かな

梅林の三本目には白き花

春の鴨河口の砂の堆し

墓地裏に居場所を定め恋の猫

犬ふぐりテニスボールの濡れしまま

野を焼いて人より高き炎かな

風愈くて鳥と見紛ふ春の波

菜の花や崖の上にも畑あり

弟の死亡広告雪催

喪主として立てる義妹や寒椿

茶毘を待つ庭に櫟の落葉して

弟の微笑む写真水仙花

高層の黒々として冬落暉

枯葦に見え隠れして鷺の群

小雪舞ひ観音像は崖に立つ

二階から赤鬼めがけ豆を撒く

舟を寄せ庭師の松の緑摘む

泉邸の島に上がりて春の鴨

井藤希

栄吉

敬子

山の影途切れるところ鴨の群

冬柏いつもの鳥の来てをりぬ

凍み大根軒に吊るして峡の晴

潮騒の聞こゆる道に梅探る

春時雨町の本屋に立ち寄りぬ

城濠に春のみぞれの水輪かな

雨足のはや遠のきて梅真白

二ヶ月の段々畑に煙立つ

四阿の影をよぎりて春の鴨

木々の芽に雨後の日差のありにけり

暁子

電飾を片付け始む小雪舞ひ

白蛇は保護網のなか日脚伸ぶ

冬終る部屋で描く絵の尽きる頃

白魚網組み立ててをる汽水域

線路降犬が土筆を嗅いでゆく

初桜雨に濡れたる光かな

花筏しづきのかかる幸せも

山桜山に登りて見えなくなる

機関区の松の緑や貨車動く

登山口親子の声の聞こえる

新庄憲彦

風花の行方を追うて空見上ぐ

紅梅や手をつなぎ行く老夫婦

鳥とまるたびに揺れたる梅の枝

如月の鯉のゆつくり泳ぎけり

春の雪ひとひらごとに日を受けて

岸辺へと水輪の及ぶ春の鴨

芽柳の岸にうしほの満ち来たる

兩岸の笹にしづきて雪解川

大樟の影を出入りの春の鳥

飛び跳ねてまた飛び跳ねて鳥の恋

知佳子

ねんねこの中の寢息に耳を立て

年新た母と仏間に経を読む

母用に丸餅を切る雑煮かな

田の中にとんどの竹を組みにけり

小正月母にマニキュア塗つてをり

ゆるやかな故郷の川春近し

春隣母をバーマに連れて行く

美容院窓の外には雉の鳴き

独り住む母の居る部屋雛飾る

スイートピー姉の写真の前に活け

水仙の香り静かにそこにあり

花種の袋に残る母の文字

カーテンを開けて眩しき二月かな

引き出しにバレンタインのチョコの見え

吟行の梅の一輪見つけたる

小鳥来て枝揺らしをり梅二月

何色と分かる嫩らみチューリップ

ニン月や使はぬ部屋に母の衣

ニン月や父の使ひし筆使ふ

春めける音戸公園下に見て

水仙はようやく景から離れたり

通学の時間を鳴いて寒雀

スプーンの遊ぶグラタン春隣

寒明くる風呂場は白き塩素臭

ゲームしてパジャマ一枚余寒の子

好きなだけ食べていい箱バレンタイン

黒鍵は白鍵の横猫の恋

掃除機とラブリング鳴る浅き春

布団干す窓枠の空梅日和

薄氷の面は幾何字模様なり

ちどり

友岡崇山子

ふじ女

臘梅の匂の下にバスを待つ

寒明の朝の空気の中に居る

立春の空をへりコプターの飛ぶ

茶道具の一つ一つの冴え返る

てのひらに溶けてしまひし春の雪

白梅の蕾ふくらむ角の家

鈴なりに蕾ふくらみ梅の道

盆栽の梅に果てしのなき御空

学校の耐震工事春浅し

いつも来る雀の声や春めけり

松田裕子

雪雲のひと塊が山包む

雪原に鴉の降りて雪つく

スキー履き棚田の上を走りけり

硝子戸に雪の結晶凍る朝

厨の戸開けて臘梅匂ひけり

バス停の人のまばらに日脚伸び

真夜中の寒の雨音聞きたり

如月の朝一番の水含む

車椅子近づけて引く梅の枝

梅林の雨にひとときは匂ひたる

松本恵和

千両の一本を足し鉄置く

山道に水仙群れて香りをり

海岸に寄せる波音春浅し

梅の香の隣の庭に漂うて

春の月バス待つ人の上にある

落椿雀のふれて転がりぬ

球根が土を盛り上げ春の風

剪定の先に広がる青き空

雀の子出窓の先にやつて来る

春の午後自転車漕いで橋わたる

美耶

すき焼きの肉に落とせる寒卵
風の中匂帳を持ちて梅見かな
風やみて匂の増せる梅の花
春曉の庭木に載せる目白の餌
玄関の靴を揃ふる雛の客
まどろみて一人朝寝の日曜日
寄せて来る波に吹きたる石鯀玉
生け垣の中の囀り聞きにけり
若布干し瀬戸の小島の防波堤
釣船の集まるところ遠霞

森口良樹

岩壁の上のホテルに冬嵐
雪の朝庭ゆく猫の足の跡
病室の玻璃越しに見る雪の色
古刹来て紅白梅を眺めをり
知らぬ間に庭の椿の咲いてをり
紅椿かたき蕾の開きけり
山桜咲く頃となり母の墓
故郷を離れて想ふ山桜
故郷は杉の花散る山のなか

大畑恵

蓮の水凍てたるままに暮れにけり
新雪を踏んでその家訪ねたる
夜の雪に池の見えなくなりけり
父の忌のひねもす雪となりけり
前髪をまつすぐ揃へ年新た
寝積の枕を三つ並べたる
画材屋のまだ団ぢてゐる三日かな
氷魚食うて旅の話を聞いてをり

桑門わかこ

木瓜の実に飛石白く暮れゆけり

護摩壇に響く太鼓や年新た

高空にはがね光の冬の月

行く春や蔭の漢たはこバスを待つ

崖下の喧騒遠く春菜摘む

雨粒のきらめきゐたり春の草

昭和の日手押しポンプの錆び付いて

大橋博子

数へ日やタオルを全部新品に

枯草や人恋ふことを忘れをり

初日の出蒼天何を約束す

住み古りし独りの家の初灯

寒卵届けてくるる友のあり

早春の墓地揺るがして汽車の過ぐ

お土産の口紅匂ふ浅き春

白神陽子

裸木の間を抜けて鴉飛ぶ

反り返りねんねこの子の眠りたる

幼子に炬燵の中のシャツを着せ

鬼やらひ疫病ありて声太し

焚口に火消し壺置きあたたかし

両の手で帽子を押さへ春一番

春の空大円となる飛行機雲

宮田保江

パソコンとテレビを前に冬籠

必需品身ほとりに置き冬籠

冬ざれや大根一つ引き残る

梟の貌のくるりと後ろ向く

鷹匠の腕にぴたりと鷹止まる

糸蜻蛉すーいすーいと水面飛ぶ

英一

四階に見おろすオペラ春隣

紅梅の蕾に雨の降りやまず

三日月の懸かつてるたる庭の梅

梅の花仏に剪りし朝まだき

坂上る轍くつきり春の雪

琵琶の音の聞えてるたる春の園

高嶋絹代

折れて咲く水仙の香の強きかな

探梅の岬の道の行き止まる

鬼やらひ子供につづき声を出し

路の藎ここから先は知らぬ道

春夕焼砂山高く固められ

春の風祠の花の水を替へ

山野ウタ

雪どけの霏立ちこめる寺苑かな

そこここに春の氣配の寺苑かな

手のひらに渡してくる路の藁

寺の裏座禅草咲く流れあり

ゆるやかに流るる川や春めけり

紀英子

粉雪が信子を待つ肩に降る

梅の香に誘われるまま歩みゆく

如月の朝の七時にベルが鳴る

如月を肌で感じてただ歩く

如月の風に吹かれて街暮れる

清水弘通

牡蠣打ちて潮の香りのほとばしる

海の味したる海鼠を噛みにけり

スーパ-の目玉の大き金目鯛

職場へと白梅の道とほりたる

綾乃

探梅はピンクのストール巻いて出る

鈴ヶ峰登頂叶ふ春近し

仏間より水仙の香や婚の朝

卒寿なる誕生日だと梅便り

遠藤さつき

雑草の中に水仙咲きゐたり

島々を結ぶ橋かな春来る

晴れの日到庭の草取始めたり

かこ

レポートを書く子に梅の香りけり

梅の香に二羽の目白の来てゐたり

車窓より見渡す川に春の鴨

上島康子

ニヶ月や記念切手のふみ届き

春の昼十七音の詩を詠んで

海鳴の方へ咲きたる黄水仙

熊谷ゆり子

集荷場に積み上げられて梅の枝

梅見酒ちびりちびりとすすみけり

春めくやカーテン揺れる午下り

民

古里に積みたる雪の十センチ

洗ひ物手にして眺む庭の梅

青空や橋の向うに梅咲いて

ちかこ

あたたかき部屋に籠りて余寒かな

紫陽花の赤き芽の色好みたる

本の字をひろうてばかり目借時

津田玲子

緑り返すピアノのリズム春近し

白梅の枝の太きに触れてみる

雛の店そつと覗いて品定め

撫子

風花へ夫送りたる朝かな

母の忌の梅の一輪ほころびぬ

梅の香を胸いつばいに吸ひ込めり

穂高

遊歩道群れて動ける寒雀

白梅の仄かに香る夜の道

廢屋に赤き椿の咲きにけり

幹

ふくいくと雨の止みたる梅の朝

白梅の香れる角で振り返る

梅を見に出づ精の母誘ひたる

みさ子

本渡れ日に如月の風吹いてくる

如月の日差を受けてものを干す

長き髪ばつさり切る娘二月かな

やす保

新しき服で出かける梅の里

生垣の向うに咲いて梅の花

雲のなき春空へ向け遂上がり

山崎桂子